

ガリト・アトラス [著]

北村婦美 [監訳]

欲望の謎

——精神分析は性・愛、そして文化多様性にどう向き合うのか

金剛出版・A5判上製

2023年11月刊行

4,620円 (税込)

評者＝鈴木菜実子 (駒澤大学／鈴木心理療法室)



本書は米国在住のイスラエル出身の精神分析家、Galit Atlas の著作の全訳である。

この本の特徴は著者 Atlas の個人的体験が明確に、詳細に、事例と論考の中に編み込まれている点であろう。性への戸惑い、結婚、妊娠・出産、さらには離婚、そしてアラブ諸国からイスラエルへ移住した家族の歴史、宗教、戦争と米国への移住までもが、著者と患者が織りなす分析プロセスの中で分析される。副題にあるとおり、性・愛・文化が分析的対象の理解に必須のものとして縦横無尽に考察されている。

選択されている事例も大変にカラフルである。彼女のオフィスを訪れる人たちは、ブラジル、イタリア、チリ、ドイツ、イスラエル、アラブ諸国と多様な出自を持つが、そのことが強調されることはない。第一言語ではない言葉でやりとりすることも、患者が自分に馴染みのない文化的背景を持つことも大前提であり、著者自身もその一例に含まれている。これは、関係学派の分析家である彼女が、分析過程を相互互恵的なものと確信しているからのみならず、彼女が開業するニューヨークはもちろん、あらゆる場所の、すべての人に文化的多様性があるものと確信しているからであろう。

第1部が最も理論的に難解で、乳児にとって過剰なもの、度を越したものが外傷となることを取り上げ、それを母親がいかに調整しようと試みるかを、母親側の能動的な関与として具体的かつ詳細に記述している。

第2部ではさらに踏み込み、映画（『ビフォア・サンライズ』シリーズ！）や、彼女自身の体験をも駆使して、出産、母親になることを、緻密に、言語的に翻訳しようと試みている。

続く第3部は、東洋と西洋の文化を対比しながら、いかに「他なるもの」として東洋が、また女性が、受け入れがたい葛藤的感情の投影の受け手とされている

かを喝破する。これは私たち日本の読者の自己理解を助けるものとなるだろう。と同時に、彼女の描く「東洋」に東アジアは含まれてさえないことに愕然とする。私たちのいる場所は、「極東 (Far East)」なのだ……。

西 (2020) は日本の精神分析の現状を概観し、女性治療者が女性性について論じる際に、過剰なまでに自らの体験を晒していると指摘しているが、本書は、女性の、マイノリティとしての当事者性を露にしながらも、それが例外的なものでも異端でもなく、精神分析が包含すべき未だ顧みられていない領域であることを示すことに成功している例と言えるかもしれない。この挑戦的な試みのために彼女は「エニグマティック」「プラグマティック」という鍵概念を用い、「抱えること」「もの思い」といった私たち精神分析的オリエンテーションの臨床家になじみ深い概念を、フランス精神分析、現代アメリカ精神分析の理論を駆使してまとめ上げている。易しい内容とはとても言えないが、喚起的な読書体験をもたらす一冊であり、翻訳はそうした本書の特徴を活かすべく、繊細な配慮がなされていると感じられる。本書を日本語で読むことができることを読者の皆さんに感謝したい。

▶ 文献

西見奈子 編著 (2020) 精神分析にとって女とは何か、福村出版。